



木もれびの森の外来種植物 (5)

ヒメヒオウギズイセン(アヤメ科ヒメトウショウブ属)

6 月ごろから剣状の葉を束生し分岐した花茎を数本出してオレンジ色をした花を穂状につける。私が小さい頃は確かキンギョソウと読んでいたのを覚えている。

この花と、18 歳の時に生け花で再開する事になる。モントプレチャ。葉組をして凜とした生花になった花姿は大層綺麗であった。

南アフリカ原産、ヨーロッパで品種改良されて各国で栽培されアメリカやアジアに帰化している。日本には、明治年間の中頃に観賞用に導入され、各地で人家の周辺などで野生化したものが見られる。

木もれびの森でもいたるところで見られ在来の種を駆逐している。球根と種子の両方で増え続けている。佐賀県では移入規制種の指定をされており栽培が条例で禁止されている。

可哀想であるが、本来の森の種ではないので葉をみたら引き抜いている。

日本本土の植物が約 4000 種、そのうち 1200 種が外来種と言われている。

外来種植物が増えてきているには多数の原因が考えられるが、ガーデニングブームとも関係がありそうである。長期にわたる不況のなかでも園芸用品の売上高は増加しているようで、栽培しやすく丈夫な植物が園芸店やホームセンター等で量販され世界中から集められた植物も多数販売されている。特に、さし芽や株分けで増やしやすいいもの、大量に種子をつけるもの、小型の植物、水草、地下茎を伸ばして増えるもの、萌芽再生する樹木、等。野外で問題になった場合防除の困難性につながる性質をもった植物であると言う認識が必要である。(この項日本帰化植物写真図鑑参考とする)

侵略的な外来植物(海外起源の外来種)による被害を予防するためには

- 1、 入れない 悪影響を及ぼすかもしれない外来植物をむやみに日本に入れない
- 2、 捨てない 栽培している外来植物を捨てない
- 3、 拡げない 野外にすでにいる外来植物は他地域に拡げない

特に、**木もれびの森では、捨てないが大事です。**

森本来の植物を大事にしていくためには、いらなくなった植物はゴミとして出してください。土も同じです。ゴミとして出す事が大切です。(土の中にタネなどが混ざっています)(高橋)



木もれびの森の森の虫たち

昆虫は変温動物ですから、冬の寒さで凍らないように土の中や樹皮の中など出来るだけ温度変化の少ない場所で、じっと冬の寒さを耐えて休眠状態で過ごしています。休眠中は、エネルギーの消費を少なくするため呼吸量も通常の半分以下で、凍結を避けるため冷たいエサも食べません。この時期全くと言っていいほど虫たちに出会うことはありませんが、比較的暖かかった11月、12月に、観察した虫たちをご覧ください。これから益々寒さも厳しくなりますが、暖かくなって又虫たちと会えるのを楽しみにしたいと思います。(海野)



ヨコズナサシガメ
の幼虫



コナラシキゾウムシ



産卵場所を探す
カメムシ



産卵しました



エサキモンツキノカメムシ

木もれびの森の樹木

ヤマコウバシ (クスノキ科クロモジ属)

2月、森の中の広葉樹は、ほとんどが落葉しています。見上げると真っ青な空が透けて見えます。秋には赤い実でにぎやかだったガマズミも、もう実に残りわずかになっています。美しかったツタウルシの紅葉も既にありません。まわりは静かに春を待つ雑木林のたたずまいです。そんな中、ひとつ明るい存在感を漂わせている小高木に目が留まります。その薄茶色の葉は陽に輝くとまるでそこだけが燃えているようです。冬でも枯れた葉をたくさんつけているヤマコウバシです。受験シーズンに葉を落とさないで、「落ちない」と、受験生を勇気づけるそうです。春になって木々が芽吹き始めるころに、枯葉を落とします。このように冬になっても葉を落とさずに残すのは、ヤマコウバシが常緑樹から落葉樹へと進化した結果でしょうか。初夏になると、もう青々とした葉を茂らせます。クスノキの仲間ら



枯葉が目立つ3月



緑葉が茂る5月



冬芽

しくその葉は爽やかな香りがし、そこから「山香ばし」という名がついたといいますが、実際の香りは少し弱いようです。常緑樹の葉の多くは冬の寒さと乾燥に耐えるために葉が厚く、表面がつるつるとしたクチクラ層で覆われています。一方、落葉樹のヤマコウバシの葉にはクチクラ層はなさそうです。4~5月、葉のわきに、薄黄緑色の小花を開きます。雌雄異株で、晩秋には直径7mmほどの実が黒く熟します。花や実はあまり目立ちませんが、どうぞ見つけてください。(鳥飼)